第１１４回とよなかまちづくり特別フォーラム

まちをつくる人々

各地の「まちづくりの時代」のうねりを連載したシリーズ「まちをつくる人々」（日経流通新聞）の筆者である脇本氏と語るまちづくりの実践

コーディネーター

日本経済新聞　編集委員

脇本（わきもと）　祐一（ゆういち）さん

まちをつくる人々

天神橋筋３丁目商店街理事長

土居（どい）　年樹（としき）さん

長野県飯田市教育委員会スポーツ課長

（前まちづくり推進室長）

高橋（たかはし）　寛治（かんじ）さん

豊中駅前まちづくり協議会　運営委員

小林（こばやし）　和久（かずひさ）さん

日時　　**場所**

2月17日（木）　ゆやホール（ボーゼム豊中7階）

午後6時30分～9時30分　阪急「豊中駅」東口すぐ

●主催／豊中市　●後援（チエ）／豊中商工会議所　豊中青年会議所　大阪府地域づくり団体協議会　（財）大阪府市町村振興協会　近畿自治体学会　日本都市計画学会関西支部　日本計画行政学会関西支部　社会・経済システム学会

●協力／豊中まちづくりネットワーク

■入場無料　■手話通訳あり　■保育あり（必要な方は１週間前までにお申し込みください。）

コーディネーター

日本経済新聞　編集委員

脇本（わきもと）　祐一（ゆういち）さん

「まちづくりに完成はない、奥はとんでもなく深い。まちづくりの本質は地域の固有価値の掘り起こしにある。これが私のまちづくり観。私のイメージするまちづくりは、あくまで平仮名の『まちづくり』である。」と言われる脇本さんは記者歴３０年、新聞記者として多くのまちづくり活動を見てこられました。

ひらがなのまちづくりを進める人々の地域の夢と課題を実現するリーダーの役割やまちの仕組みづくり、合意づくり・制度活用の工夫などの具体的な行動とまちづくりの時代のうねりが連載されている「まちをつくる人々」は、“これからのまちをつくる人々”に多くの示唆を提供しています。

今回は、豊中で“地域の固有の人々”が一堂に会し、脇本さんの仕切り役で、まちづくりの独自性と共通性についてのディスカッションをお願いしています。連載記事の行間が伝わる楽しい論議が期待できます。

まちをつくる人々

天神橋筋３丁目商店街　理事長

土居（どい）　年樹（としき）さん

天神橋筋商店街に、天神橋筋１丁目から７丁目にある８つの商店街組織がある日本で一番長い商店街です。その中の３丁目で、まちと商売の二足のわらじをいとわない「街商人（あきんど）」が土居さんです。

土居さんを含めた“七人の侍”は、「てんさんカルチャーセンター」を空き店舗に立ち上げ、クラシックコンサート、寄席、お化け屋敷、紙相撲、紙芝居、イラスト展…自主企画で運営しながら地域文化の発信基地の役割を１５年間支え続けました。３年前にその幕は閉じられましたが、文化を商店街のアイデンティティーにし、「大阪に天神橋筋あり」と知名度を上げた功績は、今のまちに息づいています。

１５年の間に異業種に広がった人脈から、天神橋筋の資源をいろんな方向から掘り起こし商店街を支えようと、ファンが組織するボランティア団体「町街（まちがい）トラスト」が生まれました。口コミで会員は増え、１年間で１千人に広がりました。体験型修学旅行を商店街に仕掛けるなど、まちに魅力を付加し、また別の個性が集まる構図を持ち込んでいます。

また、知名度が広がると、それまで決してまとまることのなかった各商店街の間にも、商店連合会が主催し天満宮も協力する「星合七夕祭」を開催したり、１丁目から７丁目までを歩き通せば“万歩状”を出すなど、協調の精神が芽生えました。一方、５丁目を中心とした天神祭での「ギャルみこし」、２丁目がアーケードに「お迎え人形」を掲げる、３丁目もブロックごとに色分けしたアーケードを新設するなど、競い合いの意識も強くなっています。

空き店舗を利用したノウハウは、レンタルスペース「おかげ屋」、第２のカルチャーセンターを狙う「MONO－GOTO館」に引き継がれています。

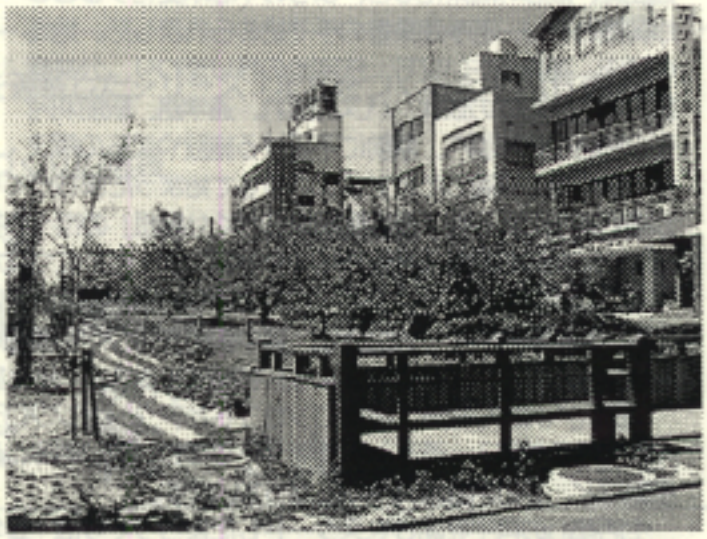
街活かしの発想と、２５年の活動の継続と、カルチャーセンターという“ハコ”の存在が支援者を生み、次のアイデアをもたらす…人の輪が継続の原動力になり、今の天神橋筋をつくっています。８時まで商売に汗を流し、それからまちの仕事をする“二毛作”をつづける土居さんは、「天神橋筋には荷車を引っ張っていればだれかが後押してくれる『商店街一が芸人論』が生きている」と話されています。

力強いリーダーの実践がたくさんの応援団を生み、まちづくりの理論、手法、推進力を育てています。

長野県飯田市教育委員会スポーツ課長

（前まちづくり推進室長）

高橋（たかはし）　寛治（かんじ）さん



長野県南端、人口約１０万人が暮らす飯田市の歴史ある旧市街地を“丘の上”と地元の人は表現します。行政と市民が一体となって開催される「人形劇フェスタ」、儒学者太宰春台、日本画家菱田春草、民俗学者柳田国男、詩人日夏耿之助らの足跡、三大大火の飯田大火と、復興のシンボルとして地元の中学生の手で生まれたリンゴ並木など、飯田ならではのものはすべて丘の上にあり、市民の思い入れが強い場所でもあります。

飯田市の中心市街地の人口はこの３０年間に５２％減少し、現在でも毎年約２％が減り続けています。丘の上では人も店も、公共施設までも郊外に移転し、３０％を越える高齢化、空洞化、地域社会の崩壊という負の連鎖だけが残りました。前まちづくり推進室長　高橋さんは、まちのあり方を考え、住みにくさに問題点があると考えました。そこで、福祉、教育、文化などの社会サービスを再開発して暮らしの場を整備し、“まちに住む”“生活の再生”をキーワードにした全員同意・全員再入居の再開発事業を市民と行政による協働で進められてきました。

通常の再開発事業は、ゼネコンが事業費を担保し、再開発ビルの保留床を処分します。しかし飯田では、住民参加の議論を通して「自分たちの思いを形にするには、自前で再開発を行い、自前の銀行を作ることが必要だ」と結論づけ、ゼネコンを入れないで事業を進め、また一般市民、商店、地場企業、長野銀行、信金などの出資により設立された「飯田まちづくりカンパニー」がデベロッパーの役割を担っています。

社会サービスの再開発を実現する市民事業として中心市街地の再開発事業を進めている飯田。歴史や社会的必然性、先例、法律を越えた行政内部の合意づくりに３年を要しました。行政の横つなぎと総合化に向けた、まちづくりの戦いが続いています。

豊中駅前まちづくり協議会　運営委員

小林（こばやし）　和久（かずひさ）さん

豊中駅前のまちづくりは、昭和63（1988）年交通混雑、阪急の高架化など、まちの中心が変化することが契機となり、若手商業者の手で始められました。地域の歴史、商業の生い立ち、住宅地の移り変わり、公共施設・神社・お寺の現状、バスの流れ、通学路、駅前利用者の動きなどを調べ、駅前に不足する施設やまちの解決すべき課題を議論したのです。こうして始まったまちづくりは、平成5（1993）年2月、地域の人が描くまちの将来像「豊中駅前まちづくり構想」の市への提案に発展しました。この動きは、豊中市まちづくり条例の制定【平成5（1993）年1月】につながっています。このように、豊中駅前のまちづくりは常にトップランナーとして“豊中方式のまちづくり”をリードしてきたのです。

豊中駅前まちづくり協議会は、豊中駅前まちづくり構想の目標である「ゆっくり歩き回れる、いきいきとした、安心して暮らせるまち」を実現するため、様々な取り組みを進めています。

面開発への取り組み、商業コンセプトとアクションプログラムづくり、介護サービスなどコミュニティビジネスの試み、音楽・環境をテーマにした取り組み、まちの改善運動としてのクリーン＆グリーン運動など、その活動は大きく広がっています。

生活都心の再生を期してスタートしたまちづくりは10年目を迎え、住民で合意した将来像を実現する段階にきています。

まちづくりに気づき、活動を始めた動機と具体的な取り組みに込められたねらいや思いを中心に“夢を形にする”市民主体、行政支援型の豊中方式の原点を見つめます。

■申込み／会場の都合により、事前にお電話又はファックス又は豊中市のホームページ（URL:http://www.senri-i.or.jp/toyonaka/index.html ）にてお申し込みください。

■問合せ／政策推進部　まちづくり支援課　Tel 06-6858-2198 Fax 06-6853-1215

ファックス送信票

2月17日（木）の「とよなか・まちづくりフォーラム」に参加します。

ふりがな 氏名	所属
連絡先 電話番号	保育の希望 あり・なし

ふりがな 氏名	所属
連絡先 電話番号	保育の希望 あり・なし

ふりがな 氏名	所属
連絡先 電話番号	保育の希望 あり・なし

ほか　　名参加